

2022. 4. 17. 主日礼拝説教
聖書：ルカによる福音書 24章 1～12節
『とまどいの中から』

イースターおめでとうございます。

ボリス・アクーニンというロシアの作家がおります。川端康成や三島由紀夫等の日本文学をロシア語に翻訳し続けて来た作家です。彼はクリミア半島へのロシア軍侵略の折「他国の自由・自治を脅かし、命と土地を奪うことに喜ぶ国にはいられない」と言って出国します。現在はイギリスで活動しています。それは「プーチンのロシアではなく、本当のロシアを創りたい」という願いが動機になっているそうです。暴力と金で人々を支配出来るという考えに取り憑かれた歴史上の人物は数限りなくおりました。しかし、それら全ての目論見は費え去っています。彼は今、ロシア国外に脱出した数百万の人々に呼びかけて反プーチン運動の先駆けとして平和のために世界中にネットワークを構築しつつあります。

ルカの背景も同じような状況でした。ローマとユダヤ教による迫害です。福音書が押し並べて記す復活の記事に共通するのは、その日の明け方に女性たちが香料を持って墓に行くと、そこにはイエスの姿は見あたらなかったという出来事です。「明け方早く」というのは安息日の終了を夜を徹して待ちわびる女性たちの切実さの強調です。彼女らの愛したイエスの遺体を一刻も早く香油で清めてあげたいという願いが伝わってまいります。一方、弟子たちはどうしていたかという、イエスの十字架での死刑執行の罪科が自分たちに及ばないように隠れていたにすぎません。墓を訪ねる訪ねないの差はありましても、彼ら彼女らにとりましては「イエスの出来事」はもうすでに終わってしまった事なのです。

墓というのは「とまどい」という意味を持ちます。死者は生者を戸惑わせてはならないという意味なのでしょう。死という一回性の隔ての向こう側に「出来事」を追いやってしまい、生という垣根を自分のまわりに張り巡らして、決して戸惑わぬよう関係を断ってしまうということなのです。つまり自分がイエスとの出来事を通して、新たに問われることや自分が変わらねばならないことから逃げ続けることの肯定なのです。実はこれこそが「死」なのです。

ルカは5節でこう記します。「なぜ、生きておられる方を死者の中に探すのか」と。もう終わってしまったとタカを括るような生き方の中に「イエスの出来事」、つまり「福音」を捜しても見つかりはしないということなのです。12節で、そのことを聞いたペトロはご丁寧にも墓の中を捜しに出かけました。しかし、自分を正当化し自己完結してしまうような生の中に、生きるという課題を捜してもはや見つかりはしないのです。

このような有り様で弟子たちは復活のイエスに出会ったのです。そこには憎しみの連鎖ではなく、全く異なる「愛の連鎖」が提案されてゆくのです。それは、生と死のはざま、愛という「とまどいの中」にとどまり続けることでした。「ここにはおられない。復活なされたのだ。まだガリラヤにおられたころ、お話になったことを思い出さない。」とルカは続けます。それは「イエスの出来事」がもう終わってしまった事ではなく、これから自分のうちに始まる出来事への確信なのです。憎しみではなく、愛によってしっかりと自分に与えられている恵みを振り返りつつ感謝をもって、もう一度自分が問われ、自分が変わる生き方へと導かれる、これが復活なのです。

たとえ人々が知らなくとも、すべてのことを知っておられる主イエスがおられる限り、私たちは誰ひとりとして無意味な仕事に駆り出されることはないのです。

それゆえ私たちは恐れずに「主がお入り用なのです」と確信させられることにのみ従ってゆけばよいのです。

自分は「主のご用」なんかに関係ない人間だという生き方をしている人々にも主イエスの側から「あなたが必要なのです」と招かれているのです。